令和８年度第２回献血推進調査会
資料２-２

マツダ株式会社における献血推進活動について

60年以上続く取組と、変化の中で協力をつなぐ仕組み

2026年11月16日

脇重　恵
マツダ株式会社　安全健康防災推進部　健康推進センター

MAZDA MOTOR CORPORATION
Confidential

目次

1.会社概要

2.社会貢献

3.献血活動



2026年8月6日 昭和天皇記念献血推進賞のトロフィーならびに表彰状の贈呈式

1.会社概要

社名	マツダ株式会社
会社創立	1920年1月30日
本社	広島県安芸郡府中町新地3番1号
主な事業内容	乗用車の製造、乗用車・トラックの販売など
従業員	22,857人





1.会社概要(国内・海外主要拠点)



(2026年2月1日時点)

1.会社概要(安全健康防災推進部 健康推進センター 組織体制)

部員:58名　2026年8月時点

安全健康防災推進部

- 総括・教育T(9名)
- 設備・交通安全T(5名)
- 作業安全・啓発T(4名)
- 防災T(3名)

健康推進センター広島(21名)

産業医(8名)

健康推進センター防府(7名)

保健師、看護師、衛生管理者、スタッフ

【 安全健康防災推進部の役割】

安全かつ衛生的な労働環境の確立および、
労働災害等諸災害の予防・対策により
従業員の安全を守り、円滑な業務運営を支援し、
労働衛生を確保するとともに、従業員の健康を
維持・増進することを目的とする



広島本社



防府 西浦工場

【健康推進センターの役割】

1)従業員の健康管理に関する全社の方針・計画の立案、推進
2)労働安全衛生法に基づく従業員の健康診断の計画立案、推進
3)職業性疾病の原因調査および助言、指導ならびに疾病管理
4)各部門における健康管理および健康増進に関する助言指導
5)健康管理および健康増進等に関する広報・啓発活動

2.社会貢献

マツダ社会貢献活動2030

地域・社会の課題やニーズに応じ、継続的な活動を通じて信頼と共感を育むため、
マツダでは、2030年に、グループ会社従業員の社会貢献活動参加率100%を目指します。

前向きに今日を生きる人の輪を広げる

地域と共に歩んできた私たちが、大切にしてきたもの。
それは、“工業で社会に貢献する”という創業の志と、社会とのつながりだ。

100年以上におよび、私たちがものづくりを続けてこられたのは、
広島の人々の支え、海に開けた恵まれた環境、地域の発展があったからに他ならない。

だからこそ、
クルマやものづくりに触れる体験、森や海を元気にする体験など、
地域とつながるアクションを通して、
子どもたちや次の世代へ、魅力溢れる人と街、美しい自然、
そして平和な社会をつないでいきたい。

そして、同じ想いを持つ人々が共に行動すれば、明日はもっと豊かになる。
そんな人たちの輪が広がっていけば、私たちの未来はもっと“歓び”に溢れていく。

そう確信しているからこそマツダは、
地域の人々とのつながりや、いきいきとする体験を通じて、
前向きに今日を生きる人の輪を
ここ広島から、全国へ、そして世界へ広げていく。

MAZDA
SMILE
PROJECT

「人」世代人材の育成

出前授業、職業講話、ものづくり体験など

「地球」環境保全・安全啓発

森林保全、地域清掃、交通安全啓発など

「社会」地域とのつながり



地域支援、福祉、災害支援、**社内献血**など

3.献血活動

1）献血活動の歩み

【従業員が献血に協力し広く社会に貢献する】

制度や運営主体が変わっても、活動の目的を受け継いできました

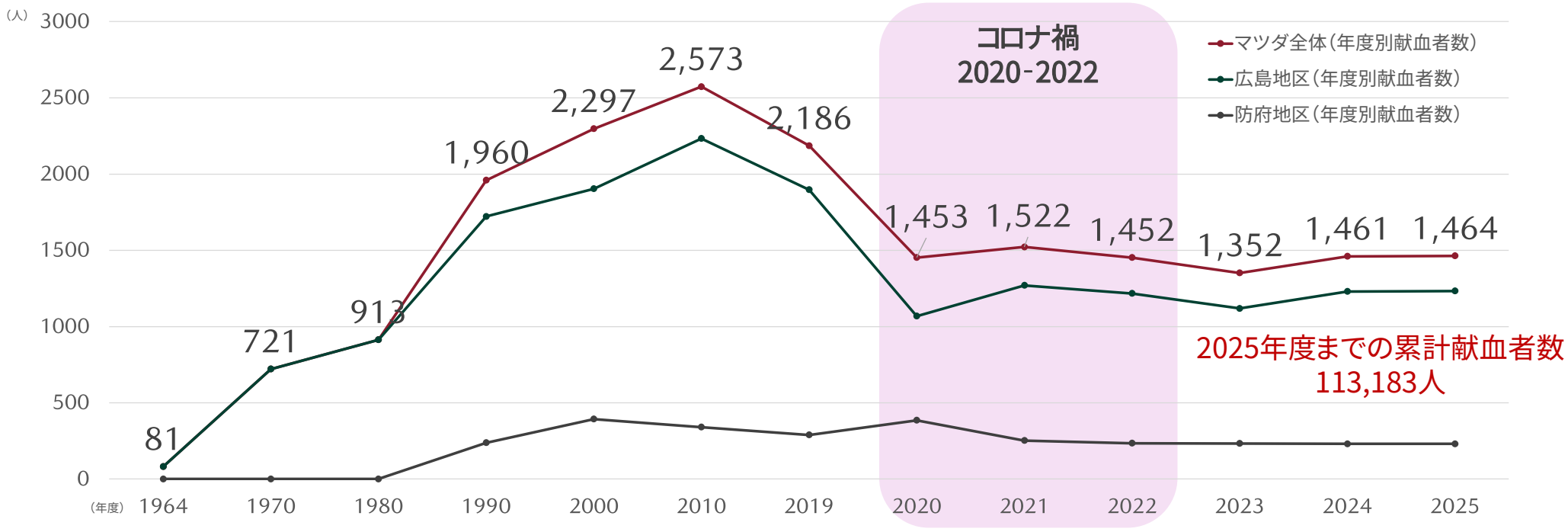
- 1964 団体預血制度 運営委員会設立
- 1970 献血制度へ移行 献血友の会に改称
- 1976 本社・本社工場 地区構内で献血 開始
- 1982 グループ会社が 献血友の会に加入
- 1983 防府工場地区構内 で献血開始
- 1988 厚生労働大臣表彰
- 1992 日本赤十字社金 色有功賞
- 2002 マツダ短大会場を 設置
- 2009 健康推進センターへ 企画・運営を移管
- 2018 厚生労働大臣表彰
- 2026 昭和天皇記念 献血推進賞受賞



2）社内献血の実績

【60年以上、社会環境が変化する中でも献血機会を継続】

制度や働き方が変化しても、一人ひとりの自主的な協力によって活動が受け継がれています



3）全国に広がる献血協力

【長年の継続と、積み重ねてきた協力実績】

マツダ株式会社に加え、全国の販売会社や関係会社においても献血協力活動が継続されています

都道府県	会社名
北海道	北海道マツダ販売株式会社
北海道	北海道マツダ販売株式会社函館店
青森県	株式会社マツダアンフィニ青森
福島県	株式会社福島マツダ
福井県	株式会社北陸マツダ　開発本店
静岡県	静岡マツダ株式会社
愛知県	東海マツダ販売株式会社
大阪府	株式会社関西マツダ

都道府県	会社名
兵庫県	株式会社神戸マツダ
奈良県	株式会社奈良マツダ
広島県	マツダロジスティクス株式会社
広島県・山口県	マツダ株式会社　本社・防府工場
香川県	香川マツダ販売株式会社
熊本県	株式会社南九州マツダ　南高江店
鹿児島県	株式会社南九州マツダ　新栄店
沖縄県	沖縄マツダ販売株式会社

日本赤十字社様提供：2020年～2024年の献血協力実績より

4）継続を支える年間運営

【特別なイベントではなく、定型業務として実施】

役割と年間の流れを定型化し、継続できる運営体制を整えています

年間計画	事前準備	繰り返し周知	当日運営	実績管理
社内外関係先と日程調整	会場担当者へ設営依頼、警備担当へ実施連絡	社内ポータル・管理監督者メール・社内放送	会場担当者と実施を支援	社内ポータルで実績報告



社内献血活動

1．開催日程・実績

広島地区	FY26 広島地区社内献血スケジュール ※本社1号館で献血をされる場合、問診会場入場のために社員証が必要です。	FY25 社内献血実績 FY25もご協力いただきどうもありがとうございました！
防府地区	FY26 防府地区社内献血スケジュール	

2．活動概要

献血とは、病気の治療や手術などで輸血や血漿分画製剤を必要としている患者さんのために、健康な人が自らの血液を無償で提供するボランティアです。
現在、日本では日本赤十字社が主として献血活動を実施しており、マツダも広く社会へ貢献すべくこの活動に協力し「一人でも多くの人の命を救うため」社内献血への協力をお願いしています。

【ありがとうの手紙 From 献血で救われたいのち】

急性リンパ性白血病を発症し、輸血を経験された友寄蓮さんの体験談を広島県赤十字血液センターよりご提供いただきました。ご本人、ご家族、ご友人、担当医師の声から、「献血の必要性」をお伝えしています。
ぜひご覧いただき、献血への協力をご検討ください。





5）参加しやすい環境づくり

【協力を求める前に、協力しやすい条件を整える】

参加へのハードルを一つずつ下げ、継続的な協力につなげています

① 業務時間に参加できる

業務時間内に、職場の理解を得て献血に参加できる環境を整えています。

② 予約と当日来場の両方に対応

ラブラッドによる事前予約ができることで、待ち時間を抑えることができる一方で、予約なしの来場も受け付けています。

③ 複数会場で定期開催

広島地区7会場、防府地区3会場で実施することで、職種や勤務場所が違っていても参加しやすい環境を整えています。

④ 複数チャネルで反復周知

社内ポータル、メール、社内放送などを使い、開催のたびに参加機会を知らせます。

6）若年層との接点

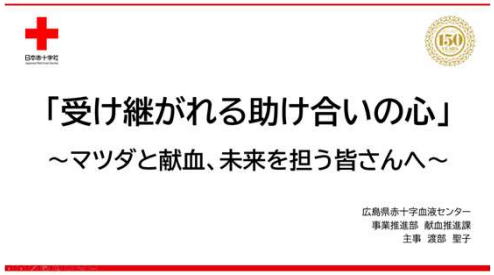
【参加者を一度に大きく増やすのではなく、接点を着実に増やす】

将来の協力者を「募集」するだけでなく、献血に触れる場所をつくります

マツダ工業短期大学校 会場

2002年、若い世代の協力を得るため、マツダ工業短期大学校に会場を設置
毎回、献血講話を開催。2025年度までで延べ5,165人が献血会場に来場





新入社員への周知

複数チャネルで反復周知することで、社内献血を知る・検討するきっかけを継続的につくる



7）勤務拠点に応じた会場設置

【勤務拠点に合わせて、参加しやすい場所に献血会場を設ける】

現業部門の従業員も参加しやすいよう、職場から移動しやすい場所に会場を設けています

広島地区

広島県赤十字血液センターの献血バスによる実施



防府地区

山口県赤十字血液センターの献血バスによる実施



8）工場との連携

【工場と連携し、現業部門が参加しやすい環境を整える】

広島・防府の生産工場と連携し、現業部門の従業員が勤務時間中でも参加しやすい環境づくりを進めています
コロナ禍による献血者減少を受け、広島本社工場では2021年に新たな会場を設置しました

① 参加しやすい開催時間

現場の作業者が業務を抜けて参加しやすい開催時間に調整

② 職場に近い会場

工場領域担当者と相談し、現業部門が移動しやすい場所へ会場を配置

③ 目に留まる周知

看板や掲示物を活用し、
献血実施を分かりやすく案内



④ 職場での参加支援

管理監督者からの声掛けや部内展開による参加支援
部のHPを活用した参加促進
本社工場独自の活動を通じた参加促進

部長からのメール



➤職制からの声掛け促進

➤献血参加実績に基づくお礼と労いのコメント

9）継続を支える仕組み

【献血できる機会を、絶やさない】

参加したいときに参加できる。それを毎年、当たり前に続けてきました。



60年以上、社会環境が変わっても

「参加できる場所」をつくり続ける

仕組み × 職場との連携 × 一人ひとりの協力

ありがとうございました

